

グラスラン、チュルゴ、コンディヤック

— 労働概念をめぐる三者の分岐

山本英子（早稲田大学博士課程）

1. はじめに

18世紀後半のフランスにおいて、1767年から1776年という極めて短い限定的な期間に、グラスラン (Jean-Joseph-Louis Graslin, 1727-90)、チュルゴ (Anne Robert Jacques Turgot, 1727-81)、そしてコンディヤック (Étienne Bonnot de Condillac, 1714-80) の3人が、それぞれ『富と租税の分析試論』(1767、以後『分析試論』と略)、『価値と貨幣』(1769)、『商業と統治』(1776)において主観価値論を表明した。本報告は、この3著作の主観価値論における労働概念の違いを明らかにすることによって、3者の学説史上の位置付けを再認識することを目的とする。

当時のフランスではフィジオクラシーが支配的であったが、純生産物だけに理論的な根拠を置いて課税するその学説に異を唱える主張も少なくはなかった。その中で最高の批判を行ったのがグラスランの『分析試論』である (Schumpeter 1954, 175)。

チュルゴは、フィジオクラシーに対するグラスランの批判や誤解に対する反批判 (Turgot 1767) を行うが、その直後の1768年には、彼はグラスランの『分析試論』に触発されて『価値と貨幣』の執筆に着手する (手塚 1933)。チュルゴはそこで、それまでの自著とは異質の主観価値を説くが、その理論的枠組みにはグラスランが提示した概念をほぼそのまま踏襲して用いた。ただ、『価値と貨幣』は草稿のまま残され、死後の1808年まで公刊されることはなかった。ということは、このチュルゴの唯一の主観価値論の草稿は、親交があった可能性があるコンディヤックも、『商業と統治』を執筆する際に知らなかったことになる¹。

チュルゴから主観価値についての影響がなかったとしても、コンディヤックがパリに再登場した²のは、『分析試論』を公刊したグラスランと、チュルゴやボードーらフィジオクラートとの論争の渦中だった1767年であることを考慮に入れば、コンディヤックがグラスランの『分析試論』を知っていた可能性は十分にある。それは、コンディヤックがグラスランと同様に不等価交換について述べたり (米田 2005, 328)、自然的欲求と人工的欲求とを区別せずに扱うべきだと明言したグラスランに対抗するかのよう、逆にその2つの欲求の区別を強調したり、そして、価値の定義などがグラスランに接近していることなどからも推察できる。このように、チュルゴの『価値と貨幣』はグラスラ

¹ 山川 1968 もチュルゴの『価値と貨幣』からコンディヤックの『商業と統治』への影響を否定する。チュルゴとコンディヤックの関係には諸説あるが、経済思想について影響し合ったかは疑問である。

² コンディヤックは1758年からパルマ公国王子の家庭教師であった。

ンの『分析試論』からその論点を受容し、コンディヤックの『商業と統治』はグラスランの主張を認識した上で議論されていると推察できる。

しかし、グラスランの一貫した主観価値理論とは対照的に、チュルゴもコンディヤックも、一面では主観価値論を標榜しながらも、労働価値やフィジオクラシーの純生産物観が入り混じることについては共通しており、その後の古典派へと繋がる潮流の中に属する。グラスランは、労働も商業も工業も政治も国家サービスも含めて主観的に説明しており、新古典派的な効用理論を表明する。このグラスラン的主観価値論を受容する際に、チュルゴは「*faculté*」、コンディヤックは「*industrie*」の概念を持ち出すが、これによって、グラスランから離れて労働価値を強調し、彼らの主観価値概念に自ら限界を設けている。

以下、次節で、三者の主観価値論を比較し、グラスラン的主観価値論からチュルゴとコンディヤックへの影響を明らかにした上で、第3節ではチュルゴの *faculté* を、第4節ではコンディヤックの *industrie* を採り上げ、主観価値と労働価値とが共存する2人の主張と、グラスランの主観価値における一貫性との相違を提示し、終節で結論を述べる。

2. チュルゴとコンディヤックによるグラスランの主観価値の受容

まず、富の定義を比較する。グラスランが「欲求と希少性の度合に応じた価値を持つ物」(Graslin 1767, 13)と富を定義したのに対して、チュルゴも「価値を持つ物」(Turgot 1767, 632)、コンディヤックも「価値を持つ物」(Condillac 1776, 39)と定義している。それ以前のチュルゴの富の定義は「人間の数」「有用物の生産」(Turgot 1753-54, 777)であったことを考慮すれば、グラスランの見解を知った直後のチュルゴの定義は、グラスランに倣ったと言えよう。また、コンディヤックも初の経済書における定義にグラスランの影響を見ることが出来よう。

次に、チュルゴが示した尊重価値（絶対価値）の3要素に倣って、彼らの主観価値を構成する要素を示す。各々の主観価値に共通する根本概念は、欲求・効用・希少性である。

グラスランの直接価値	チュルゴの尊重価値	コンディヤックの価値
①欲求対象物の属性（効用）	①欲求充足の適性	①効用物への欲求
②希少性	②希少性	②希少性
③富の序列における欲求の度合	③効用の序列における卓越性	③自然的富と人工的富

表1 価値の3要素

さらに、グラスランが示した「富の序列」の概念を、チュルゴは「効用の序列」として踏襲する。グラスランとチュルゴが想定した序列は、必要性の高い物から順に序列付けされた欲求対象物の体系である。表2のとおり、そこでは総欲求、総富量、総価値（チュルゴは「価値」の代わりに「*faculté*（能力）」）のそれぞれが比率的に一致すると見なされる。

	グラスランの 富の序列	チュルゴの 効用の序列		コンディヤックの 二分的解釈
比率的 に一致	総欲求	総欲求	自然的と 人工的は 無関与	自然的欲求＋人工的欲求
	総富量	総享有量		自然的富＋人工的富
	総価値	<i>faculté</i> 全体		自然的価値＋人工的価値

表2 欲求と賦存量と価値との関連

コンディヤックは富について体系的な序列を示さず、自然的欲求（一次的欲求）の対象である自然的富（一次的富、必需品＝土地生産物）と、人工的欲求（二次的欲求）の対象である人工的富（二次的富、便宜品＝加工品）とから成るとし、この区別を強調する（Condillac 1776, 6）。これは自然的欲求と人工的欲求の区別はしないとするグラスランの主張（Graslin 1767, 18 note）に対抗している。グラスランは、必需品であろうと便宜品であろうと、あらゆる富は、知覚された欲求と希少性に対する判断によって価値を持つとする。そして、もし文明が発展してさまざまな便宜品や奢侈品への欲求が強まれば、生存に必要な必需品であっても欲求の度合が相対的に低くなるので、便宜品や奢侈品の価値の方が大きくなり、必需品の価値はより小さくなることもあると考えるのである。

一方で、コンディヤックは、必需品である土地生産物の過剰分が加工されて便宜品となり価値を持つとするが、必需品と便宜品間に相対的な価値の関連は想定しない。彼は、物が不足していれば希少、充足量であれば豊富、有り余る場合は過剰とし、希少な状態であれば価値を持つが、充足量を超えてしまえば価値を持たないとして、希少性の「程度」への考慮は行わず、希少性の有無の判断によって価値の有無を判断する。その根拠として、彼は、賦存量の不可測性と、「不足への不安」による希少性の過大評価とによって、希少性の程度を判断することが困難であることを挙げている。実は、先行してグラスランも「不足への不安」のために過大評価が起こることを指摘しており、その不安は将来における欲求であっても、現時点で感じる欲求に加えられると述べている。以上のように、チュルゴもコンディヤックも、グラスラン的主観価値を受容したり異を唱えたりしている。

3. チュルゴの faculté

グラスランの「富の序列」からその枠組みを踏襲した「効用の序列」において、チュル

ルゴがグラスランの「総価値」の代わりに示した「*faculté*（能力）」について、チュルゴ自身は次のように述べる。

「さまざまな価値の測定とは何か？ 比較尺度は何か？ 自分の能力そのもの以外に尺度を持たないことは言うまでもない。自分の能力の総量こそ、この尺度の唯一の単位であり、出発できる唯一の定点である。そして、各対象に割当てする諸価値は、この尺度の比例的部分である。ゆえに、孤立人にとってある対象物の尊重価値とは、彼がそれを持つことへの欲求、または、この欲求を満たすのに用いようとする欲求に対応する、彼の能力全体の一部である。」 (Turgot 1969, 88)

つまり、ある人間の *faculté* 全体（分母）に対して、欲求の対象の探求に充てるために用いる *faculté* の部分（分子）の比率が尊重価値である (*ibid.*) として説明を重ねる。

「人間の享有の各対象物は、人間に注意と疲労と労働と、少なくとも時間を費やさせる。人間が各対象物の探求に充てる *faculté* の使用こそが、彼の享有の代償である価格となる。」 (*ibid.*, 87)

「[対象物の重要さに対する] 評価とは探求のための労苦と時間の分量」

(*ibid.* [] 内は筆者)

このように、チュルゴは、労働や時間など自分の持てる能力のうち、欲求対象物の取得のための代償として差出した部分の比率がその対象物の尊重価値だと何度も表明しており、これらの見解においては、表 1 に示した主観的要素のうち、少なくとも希少性は捨象し、労働価値を表明している。さらに、二者二物の交換について、チュルゴは、二者の *faculté* の合計（分母）に対する、それぞれが交換対象に充てる *faculté* の合計（分子）の比率が、評価価値（交換価値）なのだと述べる (*ibid.*, 92) が、*faculté* 自体の不可測性を理由に挙げ、価値をそれ自体として表すことは不可能だとする (*ibid.*, 94)。

こうして『価値と貨幣』におけるチュルゴは、主観価値から労働価値へと論点を移した後、価値と貨幣の関係については、自分が差し出す一部分と、受け取る物の一部分とが同じ価値であるような任意の単位として、つまり、物々交換レベルでの等価の尺度として、貨幣は価格としての価値を表す「慣習上の任意の単位」の役割を持つにすぎないとして筆を擱くが、この観点もグラスランの見解 (Graslin 1767, 54-5) の受容であった。

4. コンディヤックの industrie

「industrie」という語は、英語の「industry」と同じ語源であるが、18世紀後半のこの時期には多少ニュアンスが異なる。スミスをはじめ多くが「産業」「工業」と共に「勤

勉」の意味でも用いていることは周知だが、フランス語では「勤勉」の意味は持たない。『百科全書』（éd. 1751-66）の「industrie」の項目（Diderot, Jaucourt）では「機械による工業」の意味も含めて「全ての仕事と職業」（tous les métiers & toutes les professions）と結論付けている³。グラスランもコンディヤックも、industrie を工業の意味で、或いは手腕・腕前のニュアンスを含み、travail と近い意味で使っている。

「〔土地が希少でない場合の〕土地に対する税は、施設つまり建造物、開拓地、それに農園といった、黒人の travail と住人の industrie の産物に他ならない全ての物に対するよりも少ないのは明白だ。」（Graslin 1767, 33 [] は筆者）

「社会がその全ての富を得ているのは、農民の、職人の、そして商人の industrie からである。この industrie が賃金に値する。」（Condillac 1776, 240）

そして、グラスランによれば、労働もまた欲求対象物、つまり、欲求と希少性によって価値を持つ富であり、その価値に相当する貨幣賃金と交換される（Graslin 1767, 21）。コンディヤックは、「需要と供給の関係によって賃金が増減する」（Condillac 1776, 52）と示す限りにおいては、その需要を欲求に、供給を希少性に読み替えて解釈すれば、労働の価値をグラスランのように主観的尺度で捉えていると言える。

しかし、物の価値と、それにかげられる費用との関係についての 2 人の見解は全く異なる。まず、グラスランは次のように述べる。

「いかなる物もその価値は、費用とは無関係に、その欲求という原因によって増えたり減ったりする。」（Graslin 1767, 12 note 1）

このグラスランの見解に対して、コンディヤックは、物が賃金分・費用分に応じただけの価値を持つことについて、次のように提示する。

「水は、私がそれを得るために行った travail 分の価値を持つ。もし、自分で探しに行かないなら、私に持ってきてくれる人の travail に対して支払いをすることになろう。それゆえ、水は私が支払う賃金分の価値を持ち、したがって、輸送費用は水に価値を与えるのである。私が自分自身で水にこの価値を与えるのは、水が輸送費用分の価値を持つと判断するからである。」（Condillac 1776,, 13）

このように、industrie にせよ travail にせよ、コンディヤックは「費用がかかっている」と思うと、人はその物に全く価値がないと判断する」（*ibid.*, 12）と見なすのである。

また、コンディヤックは、土地を耕作する労働のみが「生産的」だとするフィジオクラシーに反論し、職人と商人の industrie も農民の industrie と共に「生産的」であることを主張するが、彼は土地生産物やそれらの余剰を原料とする加工品といった実物を富だとし、実物を生産する前提となる土地や労働は富とは考えず、「富の源泉」だと明示する（*ibid.*,

³ 岡田 1979 は、スミスの industry とセーの industrie の解釈について、どのような訳語を充てるにせよ、人間の自然への主体的な働きかけとしての営みの意味を背後に持つと述べる。

50)。これらの点において、コンディヤックの方がチュルゴより古典派に近い価値概念を見ることができる。

グラスランは、耕作労働 (*le travail du cultivateur*) も富 (Graslin 1767, 31) だとした上で、それを加工する *industrie* も土地生産物にそれ自体としては持っていなかった価値を与えるのだから、少なくとも土地の耕作労働と同じように、欲求と希少性によって決まるその価値の比率に応じて本質的に富だと見なし (Graslin 1767, 34)、富の源泉といたった区別を設けず、欲求と希少性によって価値を持つことを強調した。

5. おわりに

チュルゴとコンディヤックは、グラスランの一貫した欲求と希少性の理論を認識し受容した形跡を残した。チュルゴは主観的な欲求や希少性から導出した「尊重価値」をさらに労働価値へと導くが、価値と貨幣の関係についてはグラスランに再接近し、物々交換での等価の尺度として、価値どうしの比率による単位を貨幣で示すことで、価格が表明されるとした。一方、コンディヤックは、主観価値を論拠にしてフィジオクラシーの一部を批判したため、『商業と統治』は問題作とされるが、チュルゴとコンディヤックの2人は、いずれにせよ主観価値と労働価値とフィジオクラシーの3つを土台としていた⁴。

彼ら3人の3つの著作は、その後のフランスにおける政治的な激動の歴史と、古典派理論の席卷の中に埋没する。それは、コンディヤックの『商業と統治』が公刊されたのと同年の1776年に現れたスミスの『国富論』が大きな注目を集めたことと、全く対称的であった。それでも、チュルゴとコンディヤックは新古典派以降、多数の再評価があるが、より先駆性を示していたグラスランの価値理論は、20世紀以降の再評価が散見されるにすぎない。1767年の時点でグラスランは、実物ばかりでなく *industrie* も含むあらゆる富が、欲求と希少性によって富の体系を成すことを示したが、これは、全ての財・サービスを効用理論で説明する新古典派に属するものであり、メンガー (Carl Menger, 1840-1921) の『国民経済学原理』の登場より100年以上早かったのである。

[主な参考文献]

- Condillac, É. B. [1776] 1970. *Le Commerce et Le Gouvernement*. Genève : Slatkine Reprints.
Graslin, J. J. L. [1767] 1911. *Essai Analitique sur la Richesse et sur l'impôt*. Paris: Paul Geuthner.
岡田純一. 1979. 「インダストリーとはなにか—スミスとセイにおいて—」『古典経済学と産業—産業論の基礎—』(早稲田大学産業研究所) : 27-44.
Schumpeter, J. 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史・上』岩波書店, 2005.
手塚壽郎. 1933. 「心理的経済価値説の歴史的研究の一節—チュルゴの Valeurs et monnaies の想源に就いて」『福田徳三博士追憶論文集』(小樽商科大学) : 187-217.

⁴ チュルゴは『価値と貨幣』では純生産物観等にふれないが、その他の著作ではフィジオクラシーとしての主張は明確である。

Turgot, A. R. J. [1767]1909. Observation sur les Mémoires récompensés par la Société d'Agriculture de Limoges, 1. Sur le Mémoires de Graslin. In Schelle. G. (ed.), *Œuvres de Turgot*. vol. II. Paris: Alcan, 626-41.

—. [1769]1909. Valeurs et Monnaies. In Schelle. G. (ed.), *Œuvres de Turgot*. vol. III. Paris: Alcan, 79-98.

山川義雄. 1968. 『近世フランス経済学の形成』 世界書院.

米田昇平. 2005. 『欲求と秩序』 昭和堂.